

## イエメン古代史—8— 独立ハドラマウト国

(P.185) カタバーン王朝がマアイーン王朝と同時代であった様に、独立ハドラマウト国、即ち我々がこれから知る様に、その独立時代の事であり、「サブアとズー・ライダーン国」にそれが併合される前の事であるが、(この国も) 同時代であった。

ハドラマウト国は正に古代南アラブ諸国の他の国よりも、今まで変わることの無いその名前の永遠性によって秀でている。

研究者達の元にあるそれ（ハドラマウト国）に関する歴史的情報について言えば、それについての広範な文書の獲得が出来ていない為に、未だに範囲が狭い筈である。何故なら古代ハドラマウトの文書の中で発見されたもの多くは、個人や部族の古い名称を単に想起させ、そしてハドラマウトの諸部族長や部族の個々人が、彼等の信仰対象物への祈願に関して行った事を語っているだけであるからである。

その中で例えば（注：1）「大英博物館所蔵の銅板に書かれていること、それはハドラマウトの第2番目の首都であるシャブワで発見されたものであるが、「或る人物が黄金と乳香を月の神「シーン」に与えた。そして神は彼に彼の魂と感覚と子孫達と私有物と彼の心の記憶を与えた」とある。

（注：1）「古代アラブ史」ドトルフ・ネルソン著 P.228

「シーン」はハドラマウトの被崇拝物の綽名であった。同様に「アンム」はカタバーン王朝の被崇拝物の綽名で、「ムクフ」はサバア（シバ）王朝の被崇拝物の綽名で、「ワッド」はマアイーン王朝とアウサーン王朝の被崇拝物の綽名で、「ターリブ・リヤーム」はハムダーン王朝の被崇拝物の綽名であった。（ハムダーン王朝は）ハーシド系ハムダーン王国「サムイー」とその諸域を代表しているものであった。そしてこれらの事は、神の許しの下で、この書物のその該当箇所で詳細に述べられるであろう。

(P.186) 同様にハドラマウトの古代文書は、別の彼等の被崇拝物の名称や人々の中でそれに類するものや、古代イエメンの諸国家の中でそれ（ハドラマウト）以外の様なものを象徴するものについて語っていた。そして彼等の諸王の名称については余り語っていない。研究者達は彼等の数や順序や統治期間について一致していないだけでなく、（ハドラマウト）国の開始と終焉の時期でも一致していない。そして正に完全な探求と結び付いた将来、それのみが研究者達や歴

史家達に、これ（ハドラマウト）国やそれ以外の古代文明のイエメン諸国家の歴史を伝える能力があるのである。

ハドラマウトの諸王の中の王は、サバア諸王の王と同様に國家の事の初めには宗教的な「ムラッカブ」と言う名称が冠されていた。それから政治的な「王」と言う名称を冠されていた。そしてハドラマウトの最初の首都は(注：2)「マイフィウ」と言う都市であった。それは現在「ライダトッラシード」として知られる「アルハルバ」の西方に位置していた。そしてこの町は海岸線の村「マイフィウ」とハドラマウト地方の「アフル」の間にあり、そして「マイフィウ」と海岸の間には約一旅程の距離がある。

(注：2) : 「イエメン史精選」第2巻 P.158、第7巻 P.274

既に「マイフィア」の要塞化と城壁化そして城壁の上に建てられた塔について語っている多くの文書が発見されている。そして幾人かの研究者達が主張している様に、西暦4世紀には廃墟が其処を占めた様に思われる。しかしこの日付前にハドラマウトの第2の首都としてのシャブワの存在が、それより以前に最初の首都である「マイフィア」が廃墟と化した事が起こったと言う事を示しているかもしれない。

一方ハドラマウトの第2の首都はというと、ハドラマウト州のシバーム県における今日廃墟として知られる(注：3)「シャブワ」と言う都市であった。「シャブワ」において発掘調査したフランス派遣隊隊長である研究者ジャックリー・ペリンは述べた。「その（発掘）サイトはマアリブやタムナウのサイトよりも美しい。それはそこを囲む小高い丘陵群のおかげである」。この事は雑誌「ライダーン」第1巻 P.75 に記載されている。

(注：3) : 「イエメン史精選」第2巻 P.157、第7巻 P.274

また同様に研究者ジャック・フランソワ・プルトンが、同雑誌 P.89 に記載されている様に、より精緻にかつ詳細にそれを描写している。

(p.187)ハドラマウトの港の中には「カナー」港がある。これはインド洋を見下ろしており、前述の海岸線の「マイフィウ」村から近いハドラマウト州にある「ベール・アリー」港が、その廃墟の上に建てられている。そして「アルガラーブ砦」（アルムワイト、もしくはアルマーウィーヤ）は古いもので、「カナー」港を見張る砦であった。そしてその砦は、上述の港が建設された湾南部入り口を見下ろす丘陵に立っていた。

古いハドラマウトの港の中には、今日（オマーン領の）ザッファールにある「ホウル・ロウリー」港として知られる「サムハラム」がある。それはウエンデル・フィリピップスを団長とした米国人間学財団の派遣団が探索した場所の

一つである。

有名なハドラマウトの諸都市の中には、今日ハイダの名前で知られる「ムザーブ」の都市がある。そしてハドラマウトの有名な諸地域には、「アヌード城塞」がある。それはアクラの場所にかつて立っていた。ハドラマウトの諸王の中のその王は、玉座に座る折（王位に就く時）に上述の城塞（アヌード）で以外では戴冠しなかった。そしてそれ（この城塞）はシャブワの丘を結んでいる涸れ川を監視している。

一方「独立ハドラマウト国」の初期について言えば、研究者達の間では紀元前 1020 年が限界であったと言う意見が重きをなしている。この事は、ジョン・ビー・フィルビーとフィレンツ・ホーメル博士、その他の者たちが主張する事である。

独立した国家としてのその終焉について言えば、その独立を失うことが度々あった。その事は、フィルビーの意見によると、ハドラマウトの諸王の最初の人物であるハドラマウト王マアディカルブ・ブン・（アル・ヤフウ・ヤスア）・ブン・シドク・アルの死後にマアイーン王国に吸收される事が生じたためであった。上述のマアディカルブはフィルビーの意見によると紀元前 980 年にハドラマウトの統治の座に就いていた。

(P.188) ハドラマウト王マアド・ヤカルブの死後にハドラマウト王国がマアイーン王国に吸收される事を助けたこと、それはマアド・ヤカルブの子供達が彼の後に統治しなかった事である。そしてまさにその統治時代にハドラマウトがマアイーンに吸收された時のマアイーン王とは、「シドウク・アールの息子、アール・ヤフウ・ヤスウの息子、アール・ヤスウ・リヤームの息子アブ・ヤドウウ・ヤスブ」であり即ち上述のマアディカルブの甥なのである。

この意見においては、約 300 年にわたってハドラマウトがマアイーンに吸收され続けたことになる。私にとっては、ハドラマウトがマアイーンに吸收されたこと、それは正しいことであり、ハドラマウト諸王の最初のハドラマウト王シドク・アールの時代以降のことである。また彼はマアイーン諸王の系譜の中の第 2 系譜の最初の者である。何故なら彼および第 2 系譜の者達はハドラマウト人でありマアイーン人たちではないのである。しかしながらもし真実であったとしても、ジャワード・アリー博士はシドク・アールがハドラマウト人であることに疑念を抱いている。(注:7) いずれにしてもハドラマウトがマアイーンに吸收された意見とは完全なものである。

(注:7) : 「古代アラビア史補完」 P.286

ハドラマウトは紀元前 690 年に独立に戻った。そして紀元前 590 年まで独

立が続いた。上述の期間において、そこを（マラキー・カルブ）の息子（アル・スムア・ズビヤーン）と（サムフ・ヤフウ）の息子（ヤドゥウ・アル・バイイン）のそれぞれが独立を保ちながら統治した。

紀元前590年ハドラマウトは、研究者達の意見の相違はあるものの、カタバーンもしくはサバアに吸収された。そしてこれが紀元前540年まで続いた。そしてこの日付をもって(注：8)、(ハドラマウト)はサバア政権に吸収された。そしてその一部になり、そしてこれが紀元前180年まで続いた。

この年にハドラマウトは独立に戻った。と言うのはハドラマウト王（ラップ・シャムス）の息子の（ヤドゥウ・アル・バイイン）がそこを統治したからである。彼はハドラマウトに新王朝を形成し、そしてその首都をシャブワとする新ハドラマウト王国を創設した。

#### (注：8) : 「イエメン史精選」第2巻 P.148

(P.189) この（ラップ・シャムス）の息子の（ヤドゥウ・アル・バイイン）は王の息子ではなく貴族階級でも親族や名士達の出自でもなかった。そうではなく彼は「ヤフバール」族の自由人の出自であった。彼はサバアの人々に対して反旗を翻し、そして彼らと戦った。そして彼をハドラマウトの諸部族やハドラマウト以外の諸部族が支援した。そして彼は彼ら（サバアの人々）をハドラマウトとシャブア市から追い出し、そこに居を構えた。そしてそこを再建し、彼の首都となした。（このことは）彼自身をハドラマウトの王であると宣言した後のことであった。

そして（フィルビー84）と呼ばれる文書は既に次の様に語った。「（ラップ・シャムス）の息子の（ヤドゥウ・アル・バイイン）は「ヤフバール」族の自由人の出自であり、シャブア市を建設した。（その都市は）、彼とサバアの人々の間であったと思われる戦争の間に破壊された、その後に彼はそこに居を構えた。そして石造りの神殿を建立した。その事はまたそこに降りかかった崩壊の後の事であった。そして彼は、崩壊し壁で崩れ落ちたところを再建した。そしてまさに彼はこの機会を祝賀する為に、捧げものを提供することを命じた。と言う訳で雄牛（フィルビー35）と羊（フィルビー32）とガゼル（フィルビー8）と豹が屠殺された。そしてこの事は「アヌード」の城塞の中での事であった。文書はまた同様に語った。「彼は神殿の壁はコールタールやその他の層で覆った。それはその基盤からベランダに至るまで滑らかにするためであった。

この日付から紀元後270年までハドラマウトの諸王によってハドラマウトは独立して統治された。と言うのは、最終的にハドラマウトはその独立を失うからであった。それは「サバアとズィーライダーン」王国に吸収されたためであった。これはヒムヤル族の「サバアとライダーン」王国の諸王朝の第2期の最初の王である「シャムル・ヤルアシュ」王の時代以降のことである。そして

ここから「シャムル・ヤルアシュ」王は「サバアとズィーライダーンとハドラマウトとヤムナト」王との称号を冠するのである。そして王国は「サバアとズィーライダーンとハドラマウトとヤムナト」王国もしくはヒムヤル王国として知られることになる。)

### ハドラマウトの諸王のリスト

研究者ジョン・フィルビーがその年代順に設定し、このリストを作成した。(P.190)フィルビーはハドラマウトを訪問し、また彼の地にある遺跡の諸地域を訪問している。そしてそれは特に「シャブア」の(考古学)サイトである。それは1936年8月8日の事であった。

紀元前1020年—サダク・イル(即ちサデーク・イル)彼は、我々がマアイーン国の章で既に知った様に、マアイーン諸王の系譜の中の第2系譜の諸王の最初の王である。つまりそうすると彼は、フィルビーの意見によると「マアイーンとハドラマウト」の王なのである。そして彼はフウワード博士の「古代アラビアの歴史」書に関する補完において、博士が強調した人物である。

1000年—シャフル・アラヌ・ブン・サダク・イル、そして彼の長兄であるイル・ヤフウ・ヤサウは、フィルビーや彼以外の研究者達の意見によると、単独で独立したマアイーン国の玉座に就いた。

980年—マアド・ヤクラブ・ブン・アル・ヤフウ・ヤスア、彼の死後ハドラマウト王国はマアイーン王国に吸収されたのであった。そしてそれ(ハドラマウト国)はマアイーンに吸収された状態で300年が経過した。そしてその諸王は、マアイーンとハドラマウトの諸王であった。ハドラマウトの文書はこのマアド・ヤクラブの日々を述べていた。その中で彼の名前とハドラマウト王のシャフル・アラヌ・ブン・サダク・イル王の名前、そしてマアイーン國の王の名前アブ・ヤドウ・ヤスアに言及していた。それらの名前の主達は、それ(文書)の中で神「アスタル・ズー・カブダン」「アスタル・アルカービド」に対して「ハルフ」の場所で塔を建設することで恩恵を求めた。またその(文書の)中で「アスタル・シャルクン」「アスタル・アッシャーリク」そして「ワッド」それから「ナクラフ」諸神に言及することで吉兆を求めた。この文書は、ハドラマウトの玉座とマアイーンの玉座という2つの玉座の間にあった固い絆を示している。その折既にマアド・ヤクラブはハドラマウトの王であった。そして彼の兄弟のアブ・ヤドウ・ヤスアは我々が知っている様にマアイーン國の王であった。私の元での正解は先に述べたように、もしサダク・イル王以来のその諸王がハドラマウトの王家の出自であれば、マアイーン王国、それはこの3時代においてハドラマウト王国に吸収されたのであった。そしてこの王家がマアイーンの系

譜であれば、逆のことになる。

ハドラマウト王国がマアイーン王国に吸収された 3 世紀における空白は、研究者がその期間において諸王を言及していないのであった。

「マアイーン」国の歴史における彼らの氏名を列挙するだけで充分であろう。

(P.191) 紀元前 650 年 : イル・サムウ・ジビーヤーン・ブン・マラキー・カルブ。  
彼の時代に既にハドラマウトは独立に戻っていた。そしてまたハドラマウトが独立した状態でヤドウ・イル・ビーン・スムフ・ヤフウが彼の後を継いだ。そしてフィルビーの意見によると紀元前 590 年に彼の統治が終了した。

それから研究者達の間で意見の食い違いがあるが、ハドラマウトは彼の死後カタバーンもしくはサバアに吸収された。そしてその吸収は紀元前 180 年まで継続した。しかしながらハドラマウトの諸王は、地域的な影響力を持つ者として残った。

紀元前 180 年 : ヤドウ・イル・ビーン (ビーンの意味は光を当てる) ブン・ラップ・シャムス、この王はハドラマウトにおける新しい王家の創始者である。そしてこの新しい王国は、その首都にシャブアを有していた。そして既に彼はそこに彼の王宮「バイテン・シャキル」(シャキールの館) を建てた (注 : 14)

(注 : 14) 「イエメン古代史」 P.149

そして研究者のフォン・ワッツマンはラップ・シャムスを紀元前 100 年 - 120 年に設定した。(注 : 15) そして彼をハムダーン王であるアウサラ・ラフシャンと同時代人であるとした。既に我々は「イエメン人たちの系譜とその居住地の要約」の章で、ハムダーンの名、それがアウサラ・ブン・マーリク・ブン・ザイドであることを知った。つまりラップ・シャムスはフォン・ワッツマンの見解によると、フィルビーのリストに含まれないハドラマウトの諸王の一人になる。ジャウワード・アリー博士は、彼はヤドウ・イル・ビーン・ブン・ラップ・シャムス王の息子であると見なしている (注 : 15)。

(注 : 15) 「精選」 P.147

(注 : 16) 「精選」 P.153

089

150° 110

150° 210

26° 000

紀元前 160 年 : イル・ヤフウ・リヤーム・ブン・ヤドウ・イル・ビーン

紀元前 140 年 : イドウ・アブ・ギーラーン一世ブン・ヤドウ・イル・ビーン

紀元前 120 年 : イル・イッズ・ブン・アブ・ヤドウ・アブ・ギーラーン

紀元前 100 年 : ヤドウ・イップ・ギーラーン 2 世ブン・アミンム (アミーン)

(P.192) フィルビーは彼の父を王と見做さなかった。しかしながらフランツ・ホーメル博士は自らのリストに彼を加えた。

紀元前 80 年 : ヤドウ・イル・ビーン・ブン・イドウ・イップ・ギーラーン (注 :

100 頁

3051年1月1日 ~ 3051年12月31日

印刷日 3053年1月31日

登録番号 00004182

### 17)

彼の名前は文書に出てくるが、それが述べたことは、彼はシャブアの都市の城壁を建てて城塞化し、それは 2 女神「ザート・ホシュウール」と「ザート・ハミーム」のためであった。

(注：17) 「精選」第 2 卷 P.146

フィルビーの意見では紀元前 60 年から紀元前 35 年までは空白である。誰がそこを統治していたか知られていない。

紀元前 35 年：アンム・ザカル、彼の父親の名前は諸文書に出ていない。

紀元前 15 年：イル・イッズヤルト・アンム・ザカル

彼はヒムヤル王サーリヌ・ヤアブ・ヤフナアムの同盟者であった (注：18)。

この事はアルアクラの刻文の 1 つに記載されている。そして彼の名前はアルアクラで発見されたフィルビー No.81 として知られている文書に出ている。これは王位を継承した折に、ハドラマウトの王達の習慣に則って彼自身が王であると公表するためにアンワド城塞への道すがらにあったアルアクラの地に上記の王が訪問した際のことであった。上記の王について述べた箇所は次の様であった。

(注：18) 「イエメン古代史」P.50

「ハドラマウトの王イル・イッズヤルト・アンム・ザカル・シーラードジャンドルン・アンワド・ハスラカブ」この意味はつまりハドラマウトの王イル・イッズヤルト・アンム・ザカルがアンワドの城塞へ彼の称号を受けるために行つた、ということである。

紀元前 5 年：アルハーンもしくはサルハーン・ブン・イル・イッズヤルト

紀元 25 年—65 年：イル・イッズ・ヤルト・ブン・アルハーン、かれはアルヤーズース王かもしれない。この人物は、或る書物の執筆者「ベリブレス・マーリス・エリトリヤ」が言及した人物である。この執筆者は彼の本を凡そ紀元 1 世紀中頃に編纂した。そして彼は彼のことを乳香と没薬の國の王であると述べていた。そして彼は彼の首都「サーブタ」(シャブワ) で生活していた。そして彼の権力は「カナー」(現在のハドラマウトにあるベル・アリー) まで伸びていた。また同様にソコトラ島まで伸びていた。つまり明らかなことは「カナー」と「シャブワ」の間に伸びていた乳香の貿易路はハドラマウトの諸王の支配下にあったことである。(P.193) この本を発行した「W.H. シャッフ」は、アルヤーズース王は紀元 35 年—55 年に存在し、そして「サバアとズィーライダーン」の王であるカルブ・イルと同時代であり、このことは紀元 40 年—70 年に亘る。

紀元 65 年：イップ・ヤズア、彼の父親の名前は、彼の名前が述べられている

諸文書に出ていない。

紀元 85 年 : ヤルアシュ・イップ・ヤズア。恐らく彼はヤルアシュ・ブン・イップ・ヤズアであろう。

紀元 105 年 : アルハーン・アルハーン。フィルビーは、彼は紀元 125 年以降の人物であろうとみなしている。この年はアルハーン・アルハーン統治時期の最終にあたる。

そして紀元 290 年までハドラマウトにおいては、状況は不透明であった。つまり誰がそこを統治していたか知られていないのである。しかしながら上記紀元 290 年に「サバアとズィーライダーン」の王であるシャハル（もしくはシャムル）・ヤハルアシュの時代にそこ（ハドラマウト）は最終的に「サバアとズィーライダーン」に服属させられた。

「サバアとズィーライダーン」の諸王はその時以来、「サバアとズィーライダーンとハドラマウトとヤムナト」の諸王として知られるようになった。もしくはそこは様々な意見があるが、紀元 300 年になるまでシャムル・ヤハルアシュの旗下に組み込まれなかった。それにもかかわらず（注：20）上述のシャムル・ヤハルアシュの保護の下でハドラマウトの諸王の地域的な影響力は残った。そして既に彼のハドラマウトとの幾多の戦争（注：21）はその地の多くの人々をそこから取り除くことを導き、その地の諸都市や所寺院の数多く破壊することを招いた。

（注：20）「精選」第 2 卷 P.153

（注：21）「精選」第 2 卷 P.154

この人物、すなわちアルハーン・アルハーンであるが、彼はフィルビーの意見によるとハドラマウトの諸王の最後の王であった。しかしながらフィルビーが言及していないハドラマウトの別の諸王達がいる。彼等の中には次の人物がいる。

シドウク・ザハル・ベルン・ブン・イル・シャルフ、彼の名前は大英博物館に所蔵されている銅製板に記されている。そして上述の王はこの章の最初にある。

（P.194）そしてシャルフ・イル、しかしながら彼は「「サバアとズィーライダーンとハドラマウトとヤムナト」王であるシャムル・ヤハルアシュの保護の下に入った人物であった。（注：22）

（注：22）「精選」第 2 卷 P.153

## ハドラマウトにおける統治システム

ハドラマウトにおける王は、古代イエメンの諸王国におけるその他の王の様に、彼の聖なる権利から生じる彼の影響力や権勢を伸ばしていったにも関わらず（注：23）、彼は憲法的、諮問的統治法で統治をしていた。つまりハドラマウトにおいては王に加えて全体会議が存在していた。同様にハドラマウトの諸都市は、エジプトのオムド（地域の名主的な存在）制度に似た地域的な政権が統治していた。そしてこれらのオムド達は選挙によって任命され、都市の長老達からなる議会、即ち別な表現を取れば地域議会が彼らに協力した。

(注：23) 「補完」 P.279

一方民衆について言うと、彼等のグループの中には貴族的民衆がいて、階層システムを支持し、奴隸制を肯定していた。彼らは敬虔であり、寛容で、そして女性を尊重していた。そして一族のシステムを神聖化し彼等の王や祖国に誠実であった。フウワード・フスナイン博士は彼の「古代アラビアの歴史」という書の補完において「幸福のアラビアの諸国において支配的であったこのシステムはマアイーン王国の人々が北方にもたらしたと思われる。というのも北方のフェニキア人達の元で貴方はそれを見出すからであり、また彼等から地中海の諸国民やギリシャの諸都がそれを採用した」と語った（注：24）。

(注：24) 「補完」 P.279

そしてこれらは、「独立ハドラマウト王国」について、またその独立が繰り返して失われた時期とその独立が最終的に失われ、我々が見てきた様に、「サバアとズィーライダーン王国」の「シャムル・ヤルアシュ」の時代において、ハドラマウトが吸収されるまでの歴史的情報の中で研究者達が発見した事の要約である。

そしてハドラマウトの遺跡における科学的包括的な発掘がより更なる情報を発見するであろう。

(P.194 最下段まで)